

報告タイトル

佐藤栄作の台湾訪問と蒋介石の対応

Eisaku Sato's Taiwan Visit and Chiang Kai-shek's Response

氏名(所属)

段 瑞聡 (慶應義塾大学)

DUAN Ruicong (Keio University)

要旨

1967年9月に、佐藤栄作は日本の総理大臣として台湾に公式訪問した。これまでの研究では、佐藤の台湾訪問は主に沖縄返還と対台湾円借款に焦点が当てられており、その全体像がいまだ解明されていない。近年、日本外務省外交資料館、台湾外交部の関連文書、「蒋介石日記」、「蔣経国日記」などが公開されている。本報告では、それらの一次史料を用いて佐藤の台湾訪問の目的や意義、蒋介石や国府の対応について考察し、蒋介石の対日認識を明らかにする。このような研究は、1960年代の日本と台湾の関係を理解するだけでなく、日中、米中、中ソ、兩岸関係に関する理解を深めるためにも役立つと考えられる。

佐藤栄作と蒋介石の会談記録を読むと、内容が多岐にわたることが分かる。具体的には、蒋介石のアメリカの対中政策への批判、中共政権の核兵器開発、文化大革命、中ソ関係に関する蒋介石の認識、日華協力による原子力の平和利用、日ソ関係、ベトナム戦争、大陸反攻への蒋介石の期待などが含まれている。

会談記録には建前が含まれているかもしれないが、「蒋介石日記」と『佐藤栄作日記』はより本音が反映されていると考えられる。公式文書と日記を比較することで、蒋介石と佐藤栄作の相手側への認識や政治指導の特徴が明らかになる。

日本留学経験をもつ蒋介石にとって、明治維新を経て近代国家になった日本は学ぶべき手本である。しかし、日清戦争、とりわけ日中戦争を自ら経験した蒋介石にとっては、日本は百パーセント信頼できるパートナーではなかった。しかし、冷戦構造下で、大陸反攻を実現するために、蒋介石はアメリカと日本をはじめとする自由主義陣営の一員になろうとした。とはいえ、彼はアメリカに対しては批判的であった。そこには一貫して彼のアジア意識、反帝国主義意識があった。それは蒋介石の日本認識にも影響を及ぼしている。